

公開講演会記録

中国を生きる女性たちのいま

—女性の社会進出を支えた「阿姨(アニー)」という存在

ジャーナリスト／アジア・ビズ・フォーラム理事長 姫田小夏



私は上海に15年近く住んでいたが、いまなお東京—上海という2都市間を往復し、上海という都市の変貌を追い続けている。1997年、ちょうど1歳の誕生日を過ぎた娘とともに上海の土を踏んだ。当時は、こんなに「長居」をするつもりはなかったが、いつの間にか上海という地にすっかりなじんでしまった。もちろん、最初は上海の生活における「ないないづくし」には閉口した。今でこそ、「ないものはない」といわれる国際都市・上海だが、それこそ、90年代後半は米・味噌・醤油を日本から担いで行かなければ、ろくな食事もできなかった時代だった。また、不衛生が当たり前だった時代でもあり、そんな中で、おむつも取れない子どもを育て、また自らの「ライター稼業」を継続させるには相当な負荷が伴った。

しかしながら、その生活は明るかった。家の中に、上海出身の「お手伝いさん」が来てからというものの、子育てが苦ではなくなったためだ。負担を分かち合ってくれる存在がもう一人現れたのだから、当然といえば当然だが、たった一人で孤独に子育てに奮闘していた東京の生活（夫はすでに上海に駐在していた）を思うと、子育て経験のある「お手伝いさん」と一緒に、ああでもない、こうでもない」と試行錯誤しながらの子育ては、余裕も生まれ、すべてにポジティブになることができた。

他方、私は、ある上海人との出会いから、上海で日本語雑誌を創刊することになる。娘もまだ手が離れないながらも、こうした一大事業に携われたのも、この

お手伝いさんとの出会いがあったからだとつくづく思う。おかげで、中国人経営者とともに事業を発展させるという、人生においても大変貴重な経験を得ることができた。当時、世界のホットスポットといえは国際資本が集まるこの上海であり、そして「生き馬の目を抜く」と形容される競争激しいこの上海で縦横無尽に取材活動ができたのも、彼女のサポートのおかげだと思っている。

同時に、ひとたび上海の生活者としての視点を持ったとき、日本人の私は「上海の女性の強さ」に釘付けとなった。なぜ彼女たちは男勝りなのか、なぜ彼女たちは経済的に自立しているのか、なぜ彼女たちは仕事と家事を両立できるのか——。日本の女性とはあまりにも違い過ぎるその積極的かつ貪欲な生き方に、日本人と

中国人の決定的な差を感じないではいられなかった。

前置きが長くなったが、この稿では、2000年代の中国の経済発展の一翼を担ったのは、この女性たちであったこと、それには政策的スローガンが裏付けとして存在したこと、さらに突きつめれば、女性が社会進出をし、経済力をつけた背景には、その下支えに「阿姨（アーイー）」または「保姆（バオムー）」と呼ばれる「お手伝いさん」という存在があることを述べてみたい。

外資系企業のエンジンとなった上海の女性たち

80〜90年代、中国が農業国から工業立国化を目指す中で、女性技術者がその一翼を担ったことは、先の講演会でも述べた。例えば、2000年初頭は、中国の縫製工場には日本はじめ世界から多くのオーダーが舞い込んだものだが、縫製工場の経営者には上海人女性も存在した。イタリアのメーカーから注文を一手に引き受けた「バビエリ」という工場は、張さんという女性が一切を仕切っていた。彼女の猛烈な仕事ぶりは、次のような発言からもわかる。

「出産前夜は23時まで会社で働いていた。出産を終えたのは翌日の1時で、2時半にはベッドの上で仕事を始めていた」。

職場復帰は一か月後のことだった。子どもに授乳しながら社内を駆け回る彼女に、社員はみな驚愕したと言う。

対外貿易が急成長したこの時代、上海経済は外資を受け入れ急成長した。このエンジン部分となったのが、上海に進出した日系をはじめとする多くの外資系企業だった。さらに、外資系企業を動かしたのが「外国語のできる上海人女性」（当時、外省人⇨地方出身者はなかなか上海でポジションを得にくかった）と言っても過言ではない。多くの上海人女性が副総経理や経理といった上級ポジションについた。もちろん男性社員もいるが、それ以上に職場では女性のアピアランスが高い。職位を持ち所得も高い上海人女性は、あくまで筆者の肌感覚ではあるが、日本人以上に多いのではないかと感じたものである。

あらゆる消費活動は、実は男性より女性による貢献が高いというのはよく指摘されるところだが、おしゃれに敏感な上海人女性がいたからこそ、上海は「龍の頭」として中国全体の発展を牽引したの

ではないかと実感する。人よりも目立ちたい、いいものを身に着けたい、最新のものを買いたい——そんな、上海人女性独特の「進取の気性」がこの土地を発展させたといえるのかもしれない。

上海も今ではマンションが林立する立派な不動産都市だが、かつては煤煙匂う工場地帯だった。その時代、工場長が縁結び役となって工場労働者同士が結婚するというケースがよくあったが、夫婦共働きは国営時代から当然のこととして行われてきた。その後、市場経済化により比較的自由に職業が選択できるようになった世の中で、上海の女性たちは夫のフトコロを当てにしない経済的に自立した女性として、強い女ぶりをますます発揮するようになった（中には自分の稼ぎがありながらも、さらに夫の財布も支配するという強すぎる女性もいる）。“強い女ぶり”について言及すれば、彼女たちは夫を精神的に支配し、時には骨抜きにする魔力のようなものを持っているのではないかとさえ思う。

中国の工業化を支えた上海の女性たち

上海を「世界の工場」にした陰の立役者に“女性”という存在があったと筆者

は感じている。日本では今でこそ「リケジョ」という言葉が生まれ、理数系に進む女性も増えたが、90年代の日本では「女性が技術力で闘う」などとは考えられないことだった。80年代後半になって、男女雇用機会均等法によって「総合職」という言葉が生まれたが、一般的な女性の雇用は「腰掛入社」とも言われ、結婚までの期間限定というニュアンスが強いものだった。

片や中国では同じ頃、「技術女子」が活躍していた。今年83歳になる宣淑庄さんは、金型設計の技術者である。果たして日本には、83歳の技術者はいるのであるのか。日本の80歳代とえば、それこそ、男性中心の社会から「女、子どもは引込んでいろ」と見下された世代である。とてもじゃないが、男性と対等に現場で働いていたとは考えられない。

一方、宣さんは次のようにコメントしている。

「1949年以降、中国は徹底的に女性解放運動を行いました。現代中国では、女性の教育や就職の機会を重視しています」。

筆者が宣さんに会ったのは15年前だからとくに引退しているだろうが、当時「世界の工場」と国際社会が注目した中

国では、女性が研究・開発・設計分野で活躍することは珍しくなかったのである。汪洪さんは今年48歳になるお母さんだ。彼女と筆者は子どもの通うローカルの幼稚園で知り合った。東京では当時「働くお母さん」は少数派だったが、上海では「専業主婦のお母さん」こそが少数派だった。いや、むしろ皆無に近かった。

汪さんの頭の良さは会話の端々からも感じ取ることができた。何を隠そう、独シメンス社の技術者だったのである。理工系を選択したのも親の教育だそうで、「世の中、理工系なら食いはぐれがない」と言い聞かされ、上海科技大学に進んだという。80年代、成績優秀者は男女問わず理工系に進学した時代だったが、その先にある仕事はハードであり、いつも汪さんは忙しそうだった。シニアエンジニアとして、基幹ソフトである工場自動化プログラムの開発を担う彼女は、常にプレッシャーと闘っていた。

「プログラムを完成させなければ工場は動かない、いつも焦りでいっぱい」と話していたのを思い出す。

金型工場経営者といえば、どなたも漏れなく男性を想像するだろう。だが、上海に拠点を置く金型工場の中には女性が経営者だということもある。薛紅さん

(2002年当時48歳)は、科技大学で物理学、光学、機械製図など60〜70科目を学んだという。「技術を身に着ければ待遇や給与面で男女差はない」と大学では精密機械製造を専攻した。その後、同じ大学の同級生だった夫と結婚し、彼女の起業を夫が支えた。

2000年代に入って、中国の造船業界も急成長を遂げた。これもまた女性の活躍を抜きには語れないだろう。葛翠蘭さんは(現在55歳)当時、江南造船集団でコンテナ船などの船体性能を設計していた。文革直後に再スタートした大学受験に挑戦した。当時の合格者は10人にひとりの狭き門だったが「それでも合格者の3分の1が女性だった」と葛さんは振り返る。技術だけではない、葛さんは流暢な日本語も話すことができた。日本と中国の間に生まれる数々のビジネスのつなぎ目となったのが葛さんでもあるのだ。中国が農業国から工業立国化を目指す中で、女性技術者がその一翼を担ったことは、こうした事例からお分かりいただけるだろう。

女性の社会進出を裏付けるスローガン

さて、こんにちに見る女性の社会進出

を支えたのが、かの毛沢東なのである。その有名な語録に「妇女能顶半边天（天の半分は女性が支える）」がある。この言葉が生まれるきっかけとなったのが、1955年に貴州省の民主婦女連合会が「合作社における男女同額報酬の実施」という文章を発表したことだった。これが国家主席の毛沢東の目にとまるや「各地各社でその通りにせよ」と通達したのだ。

中国のインターネットで「百度（バイドゥ）」を検索すると、出てくるのが1950年代の中国における女性の地位だ。そこには、労働力が不足し、家族が口に糊するのもままならなかった時代であるにもかかわらず、女性は外で働きたがらなかったという内容が書かれている。それは、ほかならない「男社員毎日記7分、女社員只記2・5分」という、男女平等な「分工制（労働を点数で評価、のちに集計して金銭や農産物に交換する）」が存在したためだったとある。

このような状況を不服としたのが貴州省の民主婦女連合会であり、彼女たちの意見を重く見た毛沢東は、のちに「妇女能顶半边天」というスローガンを打ち出したとされている。

こうした背景を持つ現代の中国社会で

は、「女性が働くのは当たり前」だという共通認識がある。

逆に、日本の古い映画やドラマを見た中国人は、異口同音に「大男子主義！（亨主関白だ！）」と驚きを隠さない。夫の帰りを三つ指ついて迎える妻や、偉そうに「飯！飯！」と催促する夫を見て、これが日本の男性なのかと愕然とするのである。

確かに近年の日本女性は、自らの人生を謳歌しているようでもあり、男性以上にたくましい優れた人材も少なくはないが、男性の女性に対する考え方は旧態依然としたところが残る。女性を評価する社会的なマインドは、中国の方が日本よりもはるかに進んでいるのである。

データで見るとまだまだ？

一方、データからは意外な事実が判明する。鄧欣氏による「女性与领导力 一个在中国的跨国企业的案例」と題した論文によれば、「中国での女性の労働力としての参加率は1990年以降下降線を描き、その比率は大きく落ちていく」という。確かに90年代以降、中国では大きなパラダイムの転換を迎えた。女性の労働力としての参加率の下降も、いくつか

の思い当たる節がある。

1990年代前半、中国は不動産市場を開放し、多くの投機マネーがここになだれ込んだ。その後、2000年代に入り中国の不動産市場が一般市民を巻き込み、誰もがマネーゲームに熱中するようになる、「額に汗」という労働の精神はいつの間にか忘れ去られるようになった。少なくとも上海では、労働力としての女性の参加が減ってしまった理由について、「不動産バブルにより勤労世帯も大金を手にしてしまった」ことが考えられる。一言でいえば、富裕になったというわけだ。

こうして富裕層の夫人たちは「大事なのは（一人っ子である）わが子」のエリート教育に関心を傾け、現場という一線から退いてしまったのかもしれない。中には専業主婦こそステイタスだと思う女性もいたはずだ。あるいは「中国全体」のデータともなれば、そこには東北部や内陸部の数字も含まれるわけで、いまだ封建社会を引きずる土地があることも想像される。

ちなみに、「ジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index: GGI）」とは各国のジェンダー不平等状況を分析したもののだが、2016年版によれば、中国は

2016年版 ジェンダー・ギャップ指数
(Gender Gap Index : GGI)

順位	国名
1位	アイスランド
2位	フィンランド
3位	ノルウェー
4位	スウェーデン
5位	ルワンダ
6位	アイルランド
7位	フィリピン
8位	スロベニア
9位	ニュージーランド
10位	ニカラグア

(世界経済フォーラムの統計をもとに筆者作成)

99位、日本は111位となっている。国際目線で見れば、中国も女性解放が進んでいないことがわかる。また日本に至っては、中国よりもっとひどい状況になっているというわけだ。

中国全体で見る女性像と、上海という都市で見る女性像には、違いがあるのかもしれない。だが、少なくとも上海は「女性が強い土地柄」であることは間違

いないのだ。否、「強い」を通り越して「凶暴」だとも言われている。地方からの出稼ぎの女性は常に上海人女性を「太凶!」と怖がっている。その逆に、上海を含む江南地帯の男性は「優しすぎる」とも言われている。私の日本人の友人が20年前、上海の土を初めて踏んだその日に目撃したのは、女性が履いていた靴で男性の頭をスコーンと一発お見舞したという喧嘩シーンであった。いやはや、上海の女性は喧嘩も強いのである。

蓄えた富で世界を闊歩する

訪日旅行を楽しむ中国人が増えている。2015年には中国人による「爆買い」も話題となった。同年の観光消費額約3・5兆円のうち約4割が中国人客によるものだが、さらに「中国人女性の買い物」が高い比率を占めたことは想像に難くない。銀聯カードを持って、無制限に買い物を楽しむ姿は「彼女たちは打ち出の小槌でも持っているのか」と思わせるほどで、一家3人で贅沢三昧する姿に、彼らの世帯所得は一体どれほどなのかと頭をひねったものである。

訪日中国人客の旺盛な消費力の根底にあるものを一言でいうなら「ダブルイン



「爆買い」が集中したのは化粧品

カム」である。特に女性については「パートタイム」という非正規労働ではなく、職位をも与えるしっかりとした雇用により、毎月高額の収入を手に入れている。副総経理クラス(年齢でいえば、40歳代前後ならば2万元(1元≒約16円)は下らない。夫と合算すれば最低でも4万元だ。物価高とはいえ、農産物の安い上海ではあつという間に貯蓄が増え、年に3回の海外旅行も当たり前の生活になる。すなわち、訪日旅行の「爆買い」も、その土台には夫婦共働きが存在するのだ。

その夫婦共働きを支えるのは一体誰なのか? それは先に述べたように、阿姨または保姆と呼ばれる「お手伝いさん」の存在なのである。もちろん、自分の親に子どもの面倒をさせるケースも多いが、

いずれにしても、女性を家事や子育てから解放し、社会に送り出す原動力となるのがお手伝いさんなのである。彼女たちが存在する限り、上海の女性たちは社会でその実力をいかななく発揮し、富裕への道をひた走るだろう。

日本の親子関係はウェット？

一方で、日本人は「お手伝いさん」を介在させることにあまり積極的になれないようだ。「中国流」の親子間の距離の取り方に抵抗があるという人も少なくない。日本人の間では「子どもはあくまで母親が面倒をみるものであり、母親のそばに置いておくもの」という觀念が強く、何より夫が「母親が育児をするのは当たり前」と主張し、「お手伝いさんに育児をサポートさせるなどもってのほか」と抵抗を示すケースが多い。（現に筆者も、上海の日本人コミュニティの中では「子どもをお手伝いさんに任せて働くお母さん」という意味で、とても異端的な存在だった）

日本人は子どもとの物理的な距離をあまりに気にし、また母子間の絆をウェットに解釈する向きが強い。筆者自身はドライな性格なので、それについて割り切

ることができた。それは、日本人的な自己犠牲精神や献身的精神に欠けているともいえるかもしれないが、そもそも、私の人生観は「妻であり母である私にも自分の人生がある」というものなので致し方ない。

彼女たちが、自らの収入で誰憚ることなく消費生活を謳歌し、それが回りまわって企業に利益をもたらし、GDPに貢献しているとしたら、「女性解放こそが経済成長の原動力である」のだと評価せずにはいられない。日本も遅まきながらこれに気づき、日本政府も女性の社会進出を加速させるため「待機児童ゼロ」や「女性参画社会」といった目標を掲げるようになった。

他方、「お手伝いさん」がもたらした効果に注目する一方で、デメリットも思考しなければならぬ。上海にはお手伝いさんに育てられた「わがままっ子」は確かに存在する。お手伝いさんは雇われの身であることから、雇用先の子どもに対し「厳しい躾」がなかなかできないためだ。これはおじいちゃん・おばあちゃんが面倒をみるときにも言えることだ。いずれにせよ、お手伝いさんの関与が良かったのか悪かったのか、それは子どもが大人になってからでないとわからない。

また、女性が働くことにより経済が活性化される一方で、その代償となる少子高齢化という末路は避けることができない。だからと言って「家にとどまれ」という発想はあるべき「解」ではない。



女性を解放したので中国は豊かになった



晩年を謳歌する上海の高齢者たち（上海・復興公園にて）

「お手伝いさん」がいたから活躍ができた

一方、「お手伝いさん依存」をすること自体は、そもそも格差社会が前提となる。格差があるからこそ、こうした労働を受け入れる層が存在するのである。こうした社会構造はいずれ淘汰されるのだとすれば、永続的なモデルではないのかもしれない。ただし、2000～201

0年代における上海の女性（中国は広いので敢えて上海に限定する）は、明らかに「お手伝いさん」を踏み台にして社会に羽ばたいたことは事実である。

さて、日本では「イクメン」などの言葉に見るように、これでもういぶん女性中心の社会になったと言える。しかし、それでもまだ十分とは言えない。上海では日本ほどに男女差は問われないが、実力があれば年齢もまた不問にするところが多い。男女も年齢も問わない本当の意味での競争社会が上海とするならば、女性を単なる時間工としてしか見ない風潮が残る日本社会は、真の意味の国際競争に勝てるのか否か疑問が残る。

筆者は、上海でダブルインカム世帯を数多く目にし、その「富裕」ぶりを目の当たりにした。斜陽化する日本経済を救済するには、やはり「優秀な女性」の社会進出があるべきなのだと思う。ただし、「富裕」ぶりは目の当たりにしても、それが本当の意味の幸せなのかはまた別の問題である。これはまた機会を改め思考してみたいと思う。

ちなみに、筆者の娘の子育てについていえば、「阿姨という存在」は家族以外の別の価値観に触れる絶好の体験であり、日本と中国の両方の視点を持つことがで

きた貴重な経験だったと高く評価している。「阿姨」のおかげで、筆者自身は上海社会で経験を積むことができ、自分自身の成長にもつながった。親もまた常に成長し続ける存在であるとするならば、常に社会に接している親の方が子どもに与えられるものがより多くなる可能性があるのではないかと思っている。

（2017年6月29日・公開フォーラム）

筆者略歴（ひめだこなつ）

フリージャーナリスト。アジア・ビズ・フォーラム主宰。1967年東京都生まれ。1997年から上海へ。翌年上海で日本語情報誌を創刊。2008年夏、同誌編集長を退任後、語学留学を経て上海财经大学公共経済管理学院に入学、修士課程（MPA）修了。2000年代中盤からインバウンドをウォッチ、「ダイヤモンド・オンライン」「JBpress」などで最新動向を連載中。著書に『中国で勝てる中小企業の人材戦略』（テン・ブックス）、共著に『バン格拉デシュ成長企業 バン格拉デシュ企業と経営者の素顔』（カナリヤコミュニケーションズ）。今夏、『インバウンドの罠』を時事通信出版局より出版。内外情勢調査会講師。